

Title	作業報告 : <<瀧口修造1958 : 旅する眼差し>>展
Sub Title	
Author	笠井, 裕之(Kasai, Hiroyuki)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2006
Jtitle	Booklet Vol.14, (2006.) ,p.66- 75
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000014-04211372

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

作業報告：

《瀧口修造1958 旅する眼差し》展

笠井 裕之

はじめに

第29回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際展の日本代表および審査員として、瀧口修造(1903-1979)は1958年5月25日、東京、羽田を発ち、パリ経由で翌26日、イタリア、ローマに到着する。ヴェネツィアでは6月なかばまで日本館の会場設営、各国出品作品の審査等に追われるが、これらの公務を終えたのちもヨーロッパにとどまり、イタリア国内のほか、フランスのパリを拠点としてスペイン、ベルギー、オランダ、スイスと各国をめぐり、10月10日に帰国の途につくまで旅は4カ月半におよんだ。これが瀧口にとって初めてのそして生涯ただ一度のヨーロッパ滞在だった。

帰国後しばらくして瀧口は大きな転機をむかえることになる。「自筆年譜」の1959年の項に「ジャーナリスティックな評論を書くことに障害を覚えはじめ、今さらのようにみずから足を踏みこんだ世界の抜き難いことを知る¹」とあるように、瀧口はしだいに新聞雑誌のための記事を避け、親しい造形作家個人に贈ることばや個展の序文に執筆を限るようになる。その一方で、1960年のドローイングを皮きりに、デカルコマニー、バート・ドローイング、ロトデッサンといった「造形的実験」に情熱をかたむけていく。「オブジェの店」の構想に憑かれたのもこの頃のことで、オブジェとことばの関係をめぐるこの「架空の観念計画²」からは、やがて『マルセル・デュシャン語録』(英語タイトルはTo and From Marcel Duchamp)が生まれることになる。

旅が人を変えたのだろうか。いや、かつて岡田隆彦がいちはやく指摘したように、「予兆」はそれ以前、少なくとも旅の前年からあった。それは1957年、来日したアンフォルメル画家ジョルジュ・マチュー Georges Mathieu (1921-)に、瀧口が「読めない詩」(原稿用紙の罫目を文字でない記号のようなもので埋めたもの)を贈ったというエピソードで、そこに岡田は瀧口がアンフォルメル芸術との出会いから受けた「深刻な衝撃」の痕跡をみる³。たしかに「自筆年譜」の1957年の項に見える「アンフォルメル芸術

と現象的に呼ばれた傾向のなかに、自分にとってある本質的な問題にかかわるもののあることを感じる。しかもそれが長くシュルレアリスムが自分を捉えてきたものと終局において背馳すべきではないという確信のもとに⁴、ということばは重く、きびしい。「読めない詩」を贈るという戯れめいた振舞いの裏にはむしろ瀧口自身の「本質的な問題」を一貫して問いつめる姿勢が隠されていたのかもしれない、それはおそらく翌年の旅のあいだも、帰国した後も、変わることがなかったのだ。

たとえばアンフォルメルの主唱者ミシェル・タピエ Michel Tapié (1909-1987) が運転する車に同乗してパリからスペイン国境まで 600 キロ以上を走破したこと。ポルト・リガトのサルバドール・ダリ Salvador Dalí (1904-1989) 宅で偶然そこに居合わせたマルセル・デュシャン Marcel Duchamp (1887-1968) に遭遇したこと。パリのアパルトマンにアンリ・ミショー Henri Michaux (1899-1984) を訪ねて「書くことと、^{エクリール}描くことの基本的な問題、これをつなぐひとつの^{オリジン}源泉の問題^{デシネ}⁵」を語ったこと。そしてついにアンドレ・ブルトン Andr. Breton (1896-1966) との邂逅を果たしたこと……。残されたかすかすの紀行文に語られた主要な人物たちとの交流をざっと振り返ってみるだけでも、⁴カ月半という限られた旅の時間のなかに、瀧口修造の過去と現在のみならず未来までもが凝縮され、渾然としているさまがみとれる。旅は長い時間をかけて深められた問いを顕在化する触媒となって、やがて決定的な作用をおよぼすのである。

2005年12月5日から12月16日まで、慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎ギャラリーを会場として、展覧会《瀧口修造 1958 旅する眼差し》が開催された⁶。瀧口修造の1958年の旅に焦点をあて、慶應義塾大学アート・センター「瀧口修造アーカイヴ」の収蔵品のなかからこの旅に関連する資料を集めた展示である。中心となったのは、そのほとんどが旅行中の瀧口自身によって撮影された、総数にして1200枚を超える写真資料である。1938年に前衛写真研究会を組織し、同じ年に雑誌『フォトタイムス』に「写真と超現実主義」を発表して以来、数多くの写真論を書きついできた瀧口だが、彼自身が撮影した写真といえば、1958年の旅の紀行文に添えて発表したものなどごく一部を例外として、これまでほとんど知られることがなかった。

展覧会のタイトルにある「旅する眼差し」ということばには、これらの写真を「芸術写真」として鑑賞するのではなく、また「記録写真」として被写体について有益な情報を引き出すのでもなく、なによりもまず、旅人となった瀧口修造がカメラのファインダーごしに向けた視線そのものを共有してほしいというささやかな願いがこめられている。それが少しでも果たされたことを祈りながら、以下にこの展覧会の開催にいたる作業のあらましを、現場の担当者の立場からまとめておこうと思う⁷。

1. 関連資料の概要

「瀧口修造アーカイブ」に所蔵されている1958年の旅の関連資料は以下のとおりである。

(1) 写真

モノクロームのネガ・フィルムが約940点、カラーのポジ・フィルムが約300点、確認されている。その一部については引き伸ばした印画（プリント）もあり、またコンタクト・プリント（ベタ焼き）のみが現存し、ネガの失われたものもある。写真の大部分は瀧口が撮影したと推定されるが、なかには瀧口自身の姿が写っているものなど、別の撮影者によると思われるものも一部、含まれている。瀧口自身の記述から、あるいは同行者が判明している場合はその顔ぶれから、撮影者を推定できるものもある。ネガ・フィルムの袋やポジ・フィルムの箱およびマウントに撮影日の記載はない。撮影場所については、ポジ・フィルムの場合はマウントに記載のあるものが多いが、ネガ・フィルムに関しては袋に記載のあるものは少ない。また記載があっても、中に収められたフィルムがそれに対応していない場合がある。ようするに、カットされたフィルムはかならずしも撮影順にしたがって袋に収められているわけではなく、あとから入れ替えられていることが少なくない。また出版社に掲載用のフィルムを送ったためか、現像所でカットされた以外の箇所ですらにカットされているものや、失われているコマもある。

撮影に使用されたカメラの所在は不明だが、綾子夫人宛の書簡の記述から、出発前に2台用意されたと思われる。1台はキャノン（機種は特定できない）もう1台はコーワのカロワイドである。カメラが複数台使用されたことは、同じ被写体がモノクロームとカラーの両方で撮影されている例があることから裏付けられる。

多くのフィルムにカビや汚損が認められたため、洗浄保存処置をおこなった。その上ですべてのコマのデジタル画像化を実施して、モノクロームのネガ・フィルムから10枚、カラーのポジ・フィルムから3枚、計13枚のフォトCDを作成した（ファイル形式はJPEG）。また作業用にネガ・フィルムのコンタクト・プリントを用意した。

(2) 旅の記念品

美術館・画廊のチラシや入場券、乗り物の切符、観光案内図、ホテルやレストランの勘定書、さらには角砂糖の包装紙やコースター、チョコレートの銀紙、タバコの空き箱、アイスクリームのスプーン等々。これらは（おそらく瀧口の手によって）滞在地ごとに別々の大判封筒に収められている。いかにも「物憑き」を自認した瀧口らしい、一見したところ雑然としたモノの集積だが、なかには旅行中の足どりをたどる上で貴重な証拠となるものがある。たとえばホテルの勘定書や航空券、美術館のチケットの半券などで、各地の滞在日・滞在期間を最終的に確定できたのは、これらに記載

されている日付によってだった。

(3) 旅の手帖

瀧口が旅行中に使用した手帖がアーカイヴに計9冊確認されている。判型はまちまちで、多くは滞在中に現地で購入されたものと思われる。折々の覚え書き、ピエンナーレ会場をはじめ各地で訪れた美術館の作品配置図、住所録、予定表(旅の途中で修正され、作り直される)と事後の旅程メモなどが混在し、さらに日記風の記述や原稿の下書き断片も含まれている。切符や名刺がはさみこまれている場合もある。「旅の手帖」というのは仮称で、瀧口自身がそう呼んでいるのではない。また資料整理の便宜上、1から9までの通し番号をつけたが、実際には使用ずみの手帖の空白ページにあとから別の旅程のメモが書き加えられていたり、同時に複数の手帖が使用されていると思われることもあり、それぞれの手帖はかならずしも順を追って使用されたわけではない。

(4) 綾子夫人宛の書簡

留守宅の綾子夫人に宛てて投函された絵葉書¹²通と封書の手紙¹²通、計²⁴通。細かな字で旅程が詳細にわたって報告されている。

以上のほかに、重要な関連資料として、旅行中および帰国後に新聞・雑誌に発表された瀧口の著述があり⁸、また学外機関に所蔵されている資料のなかにも、アンドレ・ブルトン宛の書簡(パリ、ジャック・ドゥーセ文学図書館蔵)⁹、旅行中に入手し、瀧口の書きこみが散見されるカタログや旅行案内書(多摩美術大学図書館・瀧口修造文庫蔵)などがある。

旅行中の瀧口が現地に暮らす多くの日本人画家と交流したことが知られている。関係者の方々にインタビューをおこなって貴重な証言を得たことも付け加えておきたい。とくに瀧口と同じく富山県出身でパリの古書店めぐりなどに同行された前田常作氏、また瀧口がフランスで行動をとることがもっとも多かった浜口陽三に関してはミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション(東京)の学芸員、高橋ひろみ氏に話をうかがった。当時ヴェネツィアに学ぶ留学生でイタリア語の通訳として瀧口の公務を補佐した辻茂氏には、現在イタリア在住のため、手紙で質問に答えていただいた。

2. 基本となるデータベースの構築

旅の手帖、綾子夫人宛書簡、瀧口の紀行文の記述に加えて旅の記念品(ホテルの領収書、交通機関や美術館のチケットなど)も比較対照しながら、4カ月半の全日程について可能なかぎり瀧口の行動を跡づけ、それと並行して写真資料のすべてのコマの撮影日(および撮影順)、撮影場所、被写体の各データを確定する作業をおこなった¹⁰。

旅程の調査もさることながら、予想以上に困難を強いられたのは写真資料の整理と分析である。ネガ・フィルムの場合、1巻のフィルムがほぼ6コマごとにカットされ、ネガ袋のそれぞれのシートに収められているわけだが、前項に示したように、カットされたフィルムが別のネガ袋に移されていることが多く、その結果、撮影順を確認しようとしても、カットされたフィルム単位の、連続したコマの順番しか信頼できない、という事態が少なからず生じた。したがって各コマにあらかじめ打たれているコマ番号だけでなく、写真フィルムの分析にはそもそも当然の作業にちがいないのだが、フィルムがカットされた切り口を照合することがどうしても必要となる。作業は基本的にコンタクト・プリント（ネガの現物と同じようにカットしたもの）を用いて、撮影順にネガ用ファイル・シートに配置していったが、切り口の照合に関してはオリジナルのフィルムにあたって慎重を期した。

写真の画面から撮影場所や被写体を特定する作業にはデジタル画像を用いた。ヴェネツィア・ピエンナーレやブリュッセルの万国博覧会の会場写真はカタログ等によって撮影された美術作品を特定し、風景写真は旅程と撮影日（撮影順）からある程度、候補を絞った上で、標識や看板など、手がかりになる文字情報を画面に探して確認につとめた。もちろん、ひと目で場所が判明するものがある一方で、どうしても同定が困難な場合もある。旅程のすべての場所で現地調査をおこなうことが理想だが、今回はやむなく緊急避難的な手段をとらざるをえない場合があった。そうした手段の一例をあげればインターネットのイメージ検索の使用である。たとえばある広場を撮影した写真があり、その広場を特定できない場合、候補となる広場の名称を（ホテルの看板などの文字が読み取れるときはその文字を）検索語として入力し、検索結果の画像に写真と同じ建物があるかどうかを確認する。この方法がそれなりの効果をもつのは、ヨーロッパの建築の多くが半世紀近くの時を経てほとんど景観を変えないことによる。事実、このようにしてそれまで不明だった撮影場所のいくつかが判明し、最終的には、ほぼすべての写真について 99% 以上とっていいだろう。撮影日、撮影場所、被写体を特定するにいった。

以上の作業で得られた旅程の詳細と写真資料のデータはExcelのファイルとしてデータベース化された。入力項目は、旅程、宿泊ホテル、ネガ袋の記号、フォトCDと各コマの番号、撮影日、撮影場所、被写体、ネガ袋やポジのマウントの銘記、「旅の手帖」や書簡との対応関係、キーパーソン、キーワード等である。

3. 検索可能な展示用データベースの構築

展覧会の会場にすべての写真を展示することは不可能である。そこで、来場者が任意の写真を検索し、その写真をデータとともに閲覧できる展示用のデータベースを構築することが計画された。誰もが、マニュアルなし

で、その場で操作できることが条件となる。単純で扱いやすいユーザー・インターフェースを心がけ、必要な設定をおこなった上で、フォトCDのすべての画像データと前項のExcelのデータベースをFileMakerにインポートした。

トップページには、東京羽田を発つ機内の瀧口の写真、その横に「旅の記録」「旅の地図」「キーロケーション検索」「キーパーソン検索」「キーワード検索」「全件表示」のボタンが並んでいる。「旅の記録」の画面は日ごとの旅程の記述から、「旅の地図」の画面はヨーロッパ地図上の各都市から、それぞれ関連する写真リストにリンクが張られ、リストから写真を選ぶと、データ項目とともに画像が拡大表示される。同様に「キーロケーション検索」は「旅の地図」よりも詳細な地名から、「キーパーソン検索」は被写体となった人物や作品の製作者から、「キーワード検索」は「ピエンナーレ」「子供」といったキーワードから該当する写真を検索できる。「全件表示」ではすべての写真が撮影順に表示される。

4. 会場での展示方法

展示はⅠからⅦまで7つのゾーンに分かれている。

- Ⅰ . 1958年にいたる瀧口修造の歩み
- Ⅱ . イタリア (1958年5月25日 - 7月9日)
- Ⅲ . フランス1 (1958年7月9日 - 8月4日)
- Ⅳ . スペイン (1958年8月4日 - 8月21日)
- Ⅴ . ベルギー、オランダ、スイス (1958年8月27日 - 10月5日)
- Ⅵ . フランス2 (1958年8月21日 - 8月27日、10月5日 - 10月10日)
- Ⅶ . そして旅はつづく

「Ⅰ. 1958年にいたる瀧口修造の歩み」で戦前からの瀧口の活動を収蔵資料とともに概観したあと、それに続くⅡからⅥまでの5つのゾーンで、滞在した国ごとに1958年の旅が紹介される。瀧口はフランス(パリ)に3度にわたって滞在しているが、「Ⅲ. フランス1」に最初の滞在を、「Ⅵ. フランス2」に2度目と3度目の滞在をまとめた。最後の「Ⅶ. そして旅はつづく」には、最初のドロイングの試みとなった1960年のスケッチブックやその後制作された手作り本、岡崎和郎氏に贈られた《リパティ・パスポート》などを展示して、帰国後の瀧口が展開することになる、あらたな活動の一端を示した。

中心となる旅の展示は写真、旅の記念品、関連資料からなる。写真は印画紙にプリントするのではなく、各ゾーンの解説やキャプションとともにデジタル画像を業務用のプリンタで出力し、横方向に広がった会場の空間に合わせて、長く連続したパネルに仕立てた。瀧口が旅先で蒐集した多数の旅の記念品は、細長い帯状の亚克力板にはさみこみ、写真パネル下の

壁面に一列に配置した。その他の関連資料の展示には、各ゾーンごとに大型のガラスケースが用意された。

写真資料に関しては、上記のパネル展示に加えて、会場に設置した2台の大画面モニターによって、すべての写真のスライドショーがノン・ストップで映写された。また会場奥に設けられた関連図書閲覧用のスペースにデスクトップの端末を置き、前項のFileMakerによるデータベースを来場者が利用できるようにした。大量の写真のなかから各自の興味に応じて写真を呼び出せるこのシステムは、会場で一定の存在意義があったと思われる。さらにこのデータベースからすべての写真とデータを撮影順にプリント・アウトした紙媒体のファイル・ブック(全4冊)も用意したが、これはとくに端末の操作に馴染みのない来場者にも便宜をはかるのが目的だった。

展覧会のカタログとして、A5判³²頁の冊子を来場者に配布した。内容は、朝木、田中、柳井、笠井によるゾーンごとの解説、杉野秀樹氏(富山県立近代美術館学芸員)による瀧口と金山康喜に関する論考「1958年パリの瀧口、パリの金山」、朝木編の「旅の記録」。巻末には久納が作成した「旅の地図」を折りこみで添付した。

おわりに

慶應義塾大学アート・センターに「瀧口修造アーカイヴ」が開設されたのは2000年4月のことだが、まとまった数の収蔵資料が一般に公開される機会を得たのは、今回がはじめてである。その間も担当者たちは継続して膨大な資料(その数は1万点を超える)の整理と研究にあたってきたわけだが、展覧会を終えたいま、収蔵庫の扉を開いて成果を世に問うことの意味をあらためて考えている。もちろん、研究アーカイヴとして、地道な研究を蓄積していくことの重要性はいくら強調しても過ぎることではない。しかし、それと同時に、時に貴重な資料を外に向けて発信し、あたらしい息吹を呼びこむこともまた、わたしたちに課せられた責務なのではないか。そしてそれは今回のような展覧会という形式に限らないだろう。ともあれ短い会期にもかかわらず、予想以上に多くの、しかも熱心な来場者をむかえることができたこと、さまざまな意見が寄せられたことは得がたい喜びだった。担当者たちは大いに励まされたのである。

とはいえ、1958年の旅の主題に限っても、作業が依然として長い道のりのなかばにあることはいうまでもない。たとえば旅程の詳細についてはさらに詰めるべき問題がいくつか残っているし、旅行中の出来事や蒐集した記念品と、その後の著述や造形作品との関連を調査して、それをデータベースに反映させる必要もあるだろう。「ジェネティック・アーカイヴ」を標榜する以上、旅と作品の生成過程の秘密に分け入ることが当然、求められるはずだからだ。写真資料に関しては、同時に使用されたと思われる2台のカメラの使い分けについて、一枚一枚の写真の画面から検証する作業が残されているが、これなどは今すぐ着手すべき課題といえる。こうしてま

ポジ・フィルム（左）とネガ・フィルムの 旅の記念品
コンタクト・プリント（右）

旅の手帖

綾子夫人宛書簡

展示用データベースのトップページ画面

旅の地図の画面

展覧会会場

写真の展示（スペイン）

写真は全て慶應義塾大学アート・センター所蔵

すます道の遠さが意識され、課題があらためて浮かび上がってきたことこそが、わたしたちにとって展覧会を開いた一番の収穫であることはまちがいない。

註

- 1 瀧口修造「瀧口修造・自筆年譜および補遺」1969年初出、『コレクション瀧口修造』第1巻、みすず書房、1991年、500頁。
- 2 「一九六〇年頃から私にとって或る内部変化が起りつつあり、それは書くことの障害を伴った。その間、オブジェの問題がしきりと頭を掠め、それが或る日、オブジェの店という架空の観念計画に秘かに発展する。」(瀧口修造「ローズ・セラヴィ 58 ~ 68」1973年初出、『コレクション瀧口修造』第3巻、1996年、111頁。
- 3 岡田隆彦「欧州旅行前後の変化」、『コレクション瀧口修造』第1巻(前掲書)月報、1-3頁。
- 4 瀧口修造「瀧口修造・自筆年譜および補遺」、『コレクション瀧口修造』第1巻(前掲書) 499頁。
- 5 瀧口修造「アンリ・ミショーを訪ねる」1959年初出、『コレクション瀧口修造』第1巻(前掲書) 270頁。
- 6 展覧会《瀧口修造1958 旅する眼差し》は文部科学省「オープン・リサーチ・センター整備事業」による「デジタル・アーカイヴ・リサーチ・センター(DARC)」の研究成果報告として開催された。
- 7 作業は「瀧口修造アーカイヴ」の担当者である田中淳一、朝木由香、笠井裕之を中心に進められたが、そのさまざまな段階で慶應義塾大学アート・センターのスタッフ、とりわけキュレータの柳井康弘、テクニカル・サポートおよびデザイン担当の久納鏡子、さらに学生協力者の宮坂清、内海雄介、寺地亜衣、野尻慎哉ほかの支援を得た。
- 8 これら瀧口の紀行文の多くは『コレクション瀧口修造』第1巻(前掲書)に収録されている。
- 9 パリのジャック・ドゥーセ文学図書館 la biblioth que litt raire Jacques Doucet で田中淳一所員が確認した瀧口修造のブルトン宛書簡は全部で4通ある。そのうち最初の1958年4月6日付の書簡を瀧口は長い無沙汰を詫びることばと戦時下に逮捕拘禁された話から書きはじめている。おそらくこれが戦後になってはじめてブルトンに送った書簡だろう。文中、ヴェネツィア・ビエンナーレに出席したあとパリを訪れるので、6月下旬に会見したい旨が伝えられている(実際に瀧口がブルトンを訪問するのは10月8日および9日となる)。この書簡の下書きと思われるものが2種類、「瀧口修造アーカイヴ」に収蔵されている。ほかの3通の日付はそれぞれ1962年9月13日、1962年10月25日、1966年2月20日である。
- 10 おもに旅の手帖と綾子夫人宛書簡にもとづいて旅程を再構成した以下の先行研究があり、作業にあたって適宜参照させていただいた。渡辺嘉幸、大倉麗菜「瀧口修造1958年ヨーロッパ紀行」、『多摩美術大学研究紀要』第16号、多摩美術

大学、2002年、51-72頁。

(かさい ひろゆき・所員、慶應義塾大学法学部助教授 / 20世紀フランス文学)